

国立国語研究所 共同研究プロジェクト
「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
平成30年度 第2回研究発表会 「動詞・形容詞(本土諸方言)」

総括にかえて

平子 達也

Hirako, Tatsuya

2019年3月10日 国立国語研究所

今日の話の進め方

- 諸方言の動詞・形容詞の記述において重要と思われる点（私見）を確認
- それぞれのポイントについて、平子の立場から各発表者に質問を投げかける
- そのままディスカッションへ

動詞・形容詞の記述のポイント（私見）

- 上野（2003）を元にした私見
 - 語幹及び接辞・接語，派生・屈折の詳細な記述
 - 語の認定とその文法範疇・用法・機能の記述
 - 例外と方言語彙の調査
 - 形態統語論的記述

- パラダイムの「穴」の記述
 - 当該形式の使用頻度，複数形式間の機能差の記述

この後の流れ

- 諸方言の動詞・形容詞の記述について
 - 語幹及び接辞・接語，派生・屈折の記述
→ 高城氏発表
 - 語の認定とその文法範疇・用法・機能の記述
→ 中澤氏発表（語の認定），大槻氏発表（用法・機能の記述）
 - 例外と方言語彙の記述
→ 大槻氏発表
 - 形態統語論的記述（特に格との関わり）
→ 久保蘭氏発表
- 手話の記述から学ぶべきことと少しの質問
→ 高嶋氏発表

語幹及び接辞・接語，派生・屈折の記述

- 語幹・接辞における種々の異形態の現れを，基本形（基底形）と（形態）音韻規則によって説明
- 平子の私見
 - どのような基底形を立て，どのような形態音韻規則を想定するかは，内的な一貫性が保たれていることが前提（記述的妥当性）
 - その上で，より「経済的」な，説明力の強い記述であることを目指すことになる（説明的妥当性）

高城氏発表

- 高城氏の問題意識
 - 語幹と接辞の種々の異形態について，なるべく少ない数の基底形と形態音韻規則によって導き出す
 - 特に，語幹の異形態をまとめようとした（と見える）

高城氏への質問

- 「子音語幹」と「母音語幹」という二分は妥当か
 - 「基底形において語幹が母音で終わることがない」子音語幹動詞と「基底形において語幹が母音で終わることがある」母音語幹動詞
- athematic（高城氏の子音語幹動詞）とthematic（同，母音語幹動詞）という分類の可能性は??
 - 語形変化時にthematic vowel（語幹拡張母音：下地2018など）を伴うthematic verbと，伴わないathematic verb
 - 母音語幹動詞末の「(r)」が表層に現れるのは，条件形のみ。条件形の接辞を-rebaとする

続き

- 接辞側に基底形を想定することはしないのか？
 - 否定接辞 -aNと-N → -aN
 - 使役接辞 -asur-と-sasur- → -sasur- (あるいは-sas-)
 - 受身接辞 -arur-と-rarur- → -rarur- (あるいは-rar-)
- 以下のような共時過程を想定
 - 「開けない」 /akeN/ ←[a消去]ー //ak-e-aN//
 - 「書かない」 /kakaN/ ← //kak-aN//
 - 「開けさせる」 /akesasur-/ ← //ak-e-sasur-//
 - 「書かせる」 /kakasur-/ ←[s消去]ー //kak-sasur-//

語の認定

- 「語」をどのように認定するか
 - 語は音韻的にも統語的にも自立している
 - 接辞は音韻的にも統語的にも非自立（従属）
- 音韻的自立性は、しばしばアクセント（音調）が手掛かりに
- 統語的自立性は、当該要素の順序の自由度や当該要素間に別要素を挿入できるか否かが手掛かりに

中澤氏発表

- 中澤氏の主張
 - 接辞でありながら，固有のアクセントを有するものがある
 - 音韻的な基準（アクセント）では語の境界が一部で曖昧になることがあるため，語は文法的基準で決定した方が良い

中澤氏への質問

- -heNや-dar(-)aといった接辞が高起式の語幹に続いた場合はどのように実現するのか？
- -dar(-)aが、過去の-tar-の異形態（？）とすれば、その音韻的（アクセント上の）独立性は条件接辞-aによるものと考えられないか？
 - 発表資料 (7a) tabe-ru[L0]「食べる」と (7b) tabe-rja[L2]「食べれば」からは、条件接辞が核（下がり目）を持っていて、それが (8f) のような2単位形につながると考えられないか？

続き

- となれば，条件接辞-rjaも「固有のアクセント」を有していることになり，音韻的には「語」ということになる？
 - 同様に，(7) や (9) のそれぞれの接辞も固有のアクセントを有しているということになり，音韻的には「語」ということに？
 - 「接辞のアクセント情報と語幹のアクセント情報との関係で出力形が決まると記述するか，出来上がった当該の語形全体についてアクセント型を記述するか」という問題にも
- 諸方言に類例が多数あると思われる。
 - 尾張方言 *[ta]be-[seN ~ [ta]be(∅)-seN* (lit. 食べはしない)
 - 尾張方言 *[ta]be(∅)-se[na]Nda-racf. tabe-[na]Nda-ra*

続き

- 「アクセントを基準とすると、(17) と (18) を助詞としてまとめることができなくなってしまう」
 - 助詞などの品詞分類と、音韻的・統語的独立性の問題は、分けて考えるべきではないか？
 - 諸方言に見られる「形式名詞」は「接語」や「接辞」であることが多い

文法範疇・用法・機能の記述

- 大槻氏発表から
 - 形容詞の活用体系における「恒常」と「一時」という時間的限定性の対立
 - 動詞における完結と非完結
 - TAMや「可能」における能力・状況の別なども記述の対象に
- 大槻氏への質問
 - 動詞における完結（と非完結）の使用は義務的か？
 - 例えば、「過去の基準時の事態よりも時間的に先行する事態を表す」のに、非完結過去を用いることはあり得ないか？

用法・機能の記述について付け足し

- イットロ「(あっちに) いったいろ」：能登方言
 - 意志形由来の命令形, あるいは, 意志形の命令用法
 - 命令形「イットレ (マ)」に比べると, 優しく促すような感じ

- *-jaa*：尾張方言
 - 条件と命令：*kak-jaa* 「書けば」 or 「書きなさい」
Cf. 標準語の「早く書いたら」も条件形の命令用法？
 - *-te*など含めて（「早く書いて(よ)！」など）, 副動詞形・従属節の言
いさしの用法・機能（desubordination, 脱従属化）に関する記述も

例外と方言語彙の記述

- 標準語の「行く」のような例外的なものの記述
 - 出雲方言では ikita 「行った」
 - 東北・関東諸方言の arutta 「歩いた」など
- 方言特有の語彙でも
 - horogu (ゴミなどを払い落とす), marugu (束ねる) が促音便に (雫石方言, 上野 2003)

大槻氏への質問

- 「音便化（するはずなのに）しない例」は，その他にないか？
Cf. 「待つ」は，隠岐では一段活用（だった？）
- 同じ語幹で意味によって異なる音便形・活用形をとるという例は，津軽方言にないか？
 - 雫石方言では，*odorog-*が「目覚める」の意味と「驚く」の意味で，音便形が異なる（上野 2003）
- ちなみに，完了の *-temar-* は *-te+mar-* に分析可能か？
 - 尾張方言の *-temaw-* 「～してしまう」は分析不可（ただし，若年層[＝平子]は分析可？）

形態統語論的記述（特に格との関わり）

- 久保蘭氏発表
 - ニ格（与格）をとる形容詞
Ex. センセーニ オトロイカ「先生が怖い」
 - 下地他，松岡の主張を支持
 - ① 2つの要素を必要とする形容詞の場合に使える
 - ② 感情形容詞で最も許容され，感覚，性質の順で許容しにくくなる
 - ③ ネガティブな刺激の方がポジティブな刺激よりも許容度が高い
- 久保蘭氏の発表も含め先行研究は全て九州方言
 - 他ではどうか？

久保菌氏への質問

- 隠岐都万方言の場合（平子の調査）
 - アノ {ジーサンガ / ジーサンニ} オソロシー
「あのおじいさんが怖い」
 - 「アノ ジーサンニ オソロシー」の場合，見た目ではなく，その「ジーサン」との関わり合いがあって，その経験から「ジーサンが怖い」ということをわかっているとの話者のコメント
 - 複数の話者に対する複数の例文による調査が必要ではあるが，もしこの話者のコメントが正しいのであれば，それは，今回の3つの規則から説明が可能なものか

続き

- 隠岐都万方言の形容詞述語で二格をとる例は他にもある
 - バスガ {クルニ / クルガ} オソカッタケ チコクシタ
「バスが来るのが遅かったので、遅刻した」
 - {カケルガ / カケルニ} オシェー フタ キバツテ レンシュースラ イーニ
「走るのが遅い人は、頑張って練習すればいいのに」
 - アリヤ アルクニ ハヤェー 「あいつは歩くのが速い」
- 九州諸方言では、隠岐方言（以下の例）のように「[動詞]ニ [形容詞]」という構文は可能か？

手話の記述から学ぶべきことと少しの質問

- 高嶋氏発表：日本手話の「何」を「どう」記述するのか
 - 平子は全くの不勉強で，学ぶことばかり
- 高嶋氏の発表内容から
 - 一部の動詞では，項構造を含む（head-marking）
 - トピックマーキングに関する発見：ゼロ項文と1項文の違い
 - テンスによる屈折がない
 - 変化は，「形容詞＋軽動詞」ではなく，動詞で表される

続き

- 「日本語の影響が乏しい高齢ろう者の手話」は、どれぐらい「純粋な手話」と言えるか
 - 音声言語の場合であっても、「伝統方言」とは言え、標準語の影響の程度を正確に知ることはできないし、おそらくそれを完全に取り払うことは不可能

続き

- 手話の「品詞」はどのように決まるのか？
 - 「「形容詞+軽動詞」ではなく、「動詞」で表される」というときの、「形容詞」「動詞」とは？
- 音声言語の場合、主には以下の3つの基準で決まる
 - 形態的基準
 - 統語的基準
 - 意味的基準
- 音声言語の場合、特に「形態的基準」が重視される
 - 日本手話の場合、テンスなどによる屈折がない以上、形態的基準は使いにくいのか？

参考文献一覧

- 上野善道（2003）「記述方言学」日本方言研究会（編）『21世紀の方言学』87-100.
- 下地理則（2018）『南琉球宮古語伊良部島方言』（シリーズ記述文法1）くろしお出版.